

食事作法から見た日本

—「音」に焦点をあてて—

寛 ボルテール（倫理研究所専門研究員）

はじめに

今、世界中で日本食がブームになっている。これには和食が無形文化遺産に指定されたということも少なからず関係しているのかもしれない。そして数多い和食の中では「すし」が相変わらずの人気だが、それにもましてここ最近非常に流行し「すし」に追いついてきた和食が、日本で独自に発展してきた「ラーメン」である。東南アジアをはじめ北中南米や中東、ヨーロッパ各地でも、例えば美食の街とされているパリでさえラーメンを提供する店が増え、その勢いに乗ってか日本の有名ラーメン店も相次いで海外に店を構えはじめている。日本国外に進出したラーメン店の数は昨年（2014年）のみで200近くもあったということがJETRO（日本貿易振興機構）の調査でわかっている。

現在、食文化研究の場においてもある種異様とも言えるようなラーメンブームが起きている。ラーメンをテーマにした研究論文のみならず、学術書も多く発表されている。ここ3年間だけでも学術的にラーメンを中心に考察している英語での研究書は少なくとも5冊は発表され、ラーメンの文化・社会史から経済学、社会・文化人類学、または政治的な関連事項といった視点まで、様々な観点からラーメンは調査の対象になっている。そしてボリューム的にもこれら研究本はいずれも200～300ページにも及ぶ、いわば大著になっている。

実際の食べ物としての海外のラーメンは、麺やスープ、そして具材など主要な素材のほとんどを日本から輸入して作られているものが多い。またそれらの原材料の入手がむずかしい場合でも地元の食材を使ってうまく日本式に作られているようで、味も見た目も日本のものとほとんど変わらない。ということで、食べ物そのものだけを見れば日本と海外のラーメンにはそれほど大きな差異はないようだが、実は大きく異なる部分もある。それは食べ方である。まず欧米では、やはり箸ではなくフォークで食べる人が多い。そして東南アジアでは、先にスープを飲んでから具や麺を食べるという日本とは逆の順序で食べる傾向がある（日本でもまずはスープを一口味わってから麺に手を付けるのが正しい順序だと言う人もいるが、東南アジアの場合は味見ではなく腹に納める順序としてスープが先、麺が後なのである）。

しかしラーメンの食べ方についての最も大きな差異は、音を出して食べるか否かということである。日本では麺をすする際に音を立てるほうが一般的だが、これは海外には全くと言っていいほど存在しない行為である。ラーメンのほかにも日本ではうどんやそばなどの麺類はたいてい音を立てて食べるのが普通だが、海外では和食レストランであっても麺は音を立てずに静かに食べられているようである。ラーメンとそれにまつわる和食文化は海外進出に成功したが「おいしそうに音を立てて食べる」という習慣はなかなか「輸出」できないのである。

音を伴ってラーメンをすするといふ日本の習慣について、これは日本のラーメン文化の特徴のうち重要な部分であると前記で紹介したラーメンを調査した海外の研究者たちは口を揃えて述べている。また日本におけるマナーやしきたり全体を理解するための、一つのヒントになるのではという意見もみられる。

しかしそれら研究書では、ラーメンをすする習慣に触れてはいるものの、ほとんどは日本独特の食べ方だという短い説明にとどまる。例えば、G・ソルトの研究では次のように説明している。

「日本では熱くてヌルヌルしたものをすすることは、火傷や周囲を汚すことを避けるための実用的な方法であり、正しく行なうことによりやけどもせずスープも飛び散らかすこともない、見事な食べ方である。」

また、B・クッシュナーは「Slurp! (英語で「すする」の意味)」というタイトルの著書に次のような説明を記している。

「日本では麺をすすらないとそれが十分に温かくない、あるいはおいしくないという合図になる…中略…要するにそれはラーメンの作り手が、客が腹に麺を納めたくなるような料理をつくる、というミッションに失敗したことを意味する。」

日本人にとって麺をすするということは当たり前すぎてあまり意識することはない。しかしこれらの記述を見ると、研究書の著者や読者を含めた海外の人々は日本人の「すする」という食べ方に興味を持っているのだということがうかがえる。ところで日本における食文化研究のパイオニア的な存在といわれている研究者に国立民族学博物館の元館長の石毛直道がいる。石毛は外国人向けに出版した日本食文化についての著書で、このすする音について次のように説明をしている。なおこの著作は上記の海外の研究者らによる著作よりかなり前に発表されている。

「麺を好きな日本人にとって、のどごしの良い麺の与える感覚はとても重要のため、麺をあまり噛まないで一気に飲み込むのである。このプロセスによって音がすることは避けられないことである。」

さてこれまでいくつかの著作で「すする音」について取り上げられた例を見てきた。食べ物を「すする」という日本人の行為に対する記述の多さから、このことについては国の内外で関心を持たれているということはわかるのだが、それとは裏腹に深みを持った調査や研究はこれまであまりなされておらず、したがって「すする音」自体をテーマにした論文は実は多くはない。そこで今回はこの「すする」という行為を、日本における食事作法の文化史をたどりながら、それについての文化的な意味を考察していきたい。